

## シーラカンスの年齢

白石, 良夫

<https://doi.org/10.15017/4742075>

---

出版情報 : 雅俗. 17, pp.154-157, 2018-07-17. 雅俗の会  
バージョン :  
権利関係 :



## シーラカンスの年齢

白石 良夫

生きている化石と博物館の胎児

一九三八年、南アフリカ沖でシーラカンスが漁網にかかった。白亜紀末に絶滅したと考えられていて、そのころは化石でしか知られていなかった。その形態は化石とほとんど変わらず、進化しないまま生き続けていた事実が明らかになった。「生きている化石」と呼ばれて世界中の話題になった。

右の説明には、一見したところ、不自然なところはない。だが、ほんの一瞬ではあるが、ある錯覚をおこさせる仕掛けが潜んでいる。網にかかった不運なシーラカンスの年齢が一億歳だったかのように刷込まれることである。だから、獲れたシーラカンスを食ったら不味かったと聞いて、そんな超貴重な生き物を殺したのか、と憤慨したひとがいた。

もうひとつ例を出す。博物館のホルマリン漬けの胎児の標本をさして、友達に打ち明ける。

「これは、ばあさんの胎内にいたときのおれの親父なんだ」

ここにも、錯覚をおこさせる仕掛けがある。罪のない嘘だとすぐわかるから、一瞬の錯覚、なのである。胎児が数体並んでいて、それを同一人の成長の跡だと錯覚する、これも一瞬のことである。

活字のイメージ

こういう錯覚をおこすのは、何に起因しているのだろうか。と考えて、例をもうすこし国文学に身近なところにとると、わたしは次のような経験をする。

古典の基礎演習などの教材に版本の影印を使うと、和本を知らない多くの学生のために、和本の話をせざるをえなくなる。実物を見せて触らせて、しかし食い付きがよくないと感じたら、通一遍のところまで切り上げる。が、学生の一人でも和本を矯めつすがめつすると、ついつい深みに入ってゆく。

もつとも、ここから先は、百聞は一見に如かずとはいかない。和本の作られたかた、写本の伝播のしかた、印刷のしかた、出版の歴史から古活字版に至るまで、いちいち口で語って聞かせなければならぬ。和本の授業ではないから、駆け足でまとめる。

わたしはしゃべりながら心配になってくる、かれらはちゃんと江戸時代にタイムスリップしているのだろうか、具体的にイメージできていくだろうか、と。

案の定、こんなことを言ってくる学生がいた。サンプルにした漢字・片仮名交じりの古活字本のコピーの、数個の同じ片仮名文

字を、「これとこれとこれと……」と指差しながら、

「形がどれも違うんですが」と言う。

たしかに、仔細に見ると、撥ねや打ち込み、線の太さなど、まちまちである。

「そうだね」と言っていて、それでどこが不都合なのかと口には出さないが、そんな素振りの対応をする。それを不満げに、熱心な学生は言う。

「だって、活字でしょ?」

どうやら、かれの頭のなかにある江戸の印刷工房には、一文字につき一箇の活字しか用意されてないらしい。

「二ページに複数箇の「イ」があれば、少なくともその数だけの「イ」の活字が必要だ。手作業で彫ったのだから、寸分違わずというのは、無理な注文だろう」

「じゃあ、ものすごく沢山の活字が必要になりますか」

「そうだね」

呑み込みのいい学生は鱗が落ちた目になって、納得する。

シーラカンスとホルマリン漬けの胎児、古活字版の三つの挿話に見る錯覚、その要因には共通点がある。それは、モノを具体的なモノとして把握する目を欠いたことである。人間には、無意識のうちに、モノを抽象化して認識する癖が染み付いていることを知らされる。

いや、癖ではない。人間しか持たない能力なのであって、この能力が数学や哲学を生み、その余の学問を発展させて、文明を築いてきた。人類はながい年月をかけて、モノを抽象化させる本能

を身につけた。さらに教育によってそれを鍛えてきたのである。

モノを抽象化させることに人間は努力してきたが、しかし、抽象化されたことを具体的なモノに還元しようとする意識は希薄である。生まれたときの個人の認識が、指を使って数を数えたようにモノから始まっているので、簡単にモノに還元できるからである。ひとつの注意喚起で、それに気がつく。シーラカンスや胎児のホルマリン漬け、学生にとっての活字のように。

もともと、今の学生にとっては、活字そのものがモノとして還元させにくい代物しろものなのかもしれないが。

モノとしての本、観念のなかの本

A 「ポロポロになった本」

B 「本から得た知識」

比喩ではなく、ごく普通のことを言った文章であるならば、二つの用例の「本」は、互いに異なった概念の本である。Aは目で見える個体の本(具体的なモノ)、Bは観念のなかにある本(抽象物)、という違い。網にかかって食べられたシーラカンス、一億年生き続けたシーラカンス、の違いである。

一般的な文学史事典の書名項目に求められるのは、Bの情報である。であるから、「万葉集は現存最古の歌集」というときの「現存最古」は、「法隆寺は現存最古の木造建築」というときの「現存最古」とは意味が異なる。室町時代の古写本でも、江戸の版本でも、岩波文庫でも、万葉集は「現存最古」の歌集である。だが、法隆寺の場合、かりに明治時代に建て替えられたものなら、どん

なに精巧な復元であったとしても、いや精巧であるないに関係なく、「現存最古」の木造建築にはならない。

そのところが、文学史と美術史との違いであるのだろう。文学作品をモノとして把握する感覚は、普通のひとには希薄である。だから、「なんでも鑑定団」に古典の文学資料が持ち込まれることが少ないのである。西郷南洲の漢詩の掛け軸が登場しても、美術品（骨董品）としてより、文字を解読し作品鑑賞をしてしまう。モノが対象の番組だから、おそらく鑑定士には不本意であろう。が、テレビの前の不特定多数に受け入れてもらおうとすれば、意識してそうならざるをえない。

軸物という美術品が、文字だけとなると、かくのごときである。だから、源氏物語のどんなに貴重な古写本（モノ）が出てきても、紫式部原作の、貴公子が主人公の、あの長大な、平安時代に作られたあの不朽の名作、ということのほうに解説の重点が置かれる。鎌倉時代に作られた書籍（モノ）だという情報は、付けたりになる。

文学研究は、文字を読まないことには始まらないのだから、それが写本だろうと版本だろうと活字本だろうと、文字を読む能力（文献学の一部）は欠かせない。だが、研究対象をモノとして語らないから、誤解を恐れずにいえば、書物というモノに関する興味や知識（書誌学）は、あつて悪いわけではないが、必須ではない。現に、日本の外国文学研究者の多くは、書誌学を肌で知らない。国文学もそれ（Aの知識）なしで通用する。あげられる業績の大小には、まったく関係しない。

善本解題は目指さない

小城鍋島文庫研究会の活動のメインに、文庫蔵書の調査とその報告がある。悉皆調査で、報告も全蔵書の解題を目指す。その目標はわたしの提案だったが、そのときメンバーの多くが問題にしたのは、書目の選定とその基準づくりだった。

わたしの回答は、

「選定はしない。だから、基準はいらぬ。対象は全蔵書である。善本解題ではない」

であった。メンバーは理解しかねたようだが、わたしの「真意」はこうである。

この研究会が「小城鍋島文庫研究会」であり、科研に申請した研究題目が「地域の文化財群としての小城鍋島藩蔵書の研究」であり、その副題が「その全貌の解明」であった、そこに思いを致してもらいたい。であるから、解題執筆においては、それがかつて小城鍋島藩の蔵書の一冊であったという歴史的事実を、つねに強く意識していただきたい。たとえそれが片々たる雑本であつても、一冊の薄汚れた端本であつても、である。このような視点に立った個々の書誌解題を集積することによって、専門家の読むに堪える、小城鍋島文庫の歴史と現在を語る、そんな読み物を実現したい。

だから、善本解題ではないのである。だから、選定のための基準を考える必要もないのである。わたしの求めたのは、小城鍋島文庫の個々の資料を、そこに在るモノとして記述することであつた。

昨年五月、研究会主催のシンポジウム「肥前鍋島家の文雅」に

あわせて、『小城鍋島文庫蔵書解題集』を作成し、会場で配った。調査も半分余しか済んでいなかったが、研究会のアピールと途中経過報告を兼ねた試行版である。調査参加者二十二名全員に執筆を促し、結果、十二名の原稿が集まった。調査済みの全書目ではなく、各自がその時点で書けるものだけに限った。

匆卒の間の作業ゆえ、執筆要領らしいものといえは、

(1) 文庫固有の書誌情報に重きをおくこと

(2) 叙述は簡潔を旨とすること

ぐらい、あとはわたしの書いた数件のサンプルを示しただけであった。体裁の不統一、内容の繁簡、文章の巧拙は織り込み済み、今後の課題を浮き彫りにさせるための、あくまでも試行版である。当然、わたしの真意がまだ周知浸透していないことも承知していた。

メジャーであるほど内容は二の次

二箇条の執筆要領のうち、(1)のほうに、わたしの「真意」を籠めた（つもりであった）。左はわたし自身の項目である。

指月夜話（しげつやわ） O-19 写

大本、四卷四冊（巻二・三・五・六存）。表紙題簽なし、打付け書きで「南洞録」とあり（この書名不審）。内題・目録題「指月夜話」。全七冊だったと思われるが、首尾を欠くため、序跋の有無や書写事情等不明。蔵書印は「荻府学校」のほか「菴羅園」「不式之印」の二類あり。

該書に著者情報はないが、小城出身の黄檗僧、潮音道海の著作とされる。漢文随筆集。禅宗だけでなく、神道や仏教・

儒教・政治論など幅広い話題を評論する。

字数は自分の要求したもの（四百字前後）に満たないが、ノイズをできるかぎり排して、執筆要領に忠実に従った結果、こうなった。二段落に分けたのは、前半が(1)の文庫固有の情報、後半は事典の情報、という意図である。無論、杓子定規に分けられない世界であるから、そこは執筆者の裁量に委ねるしかない。

「文庫固有の書誌情報」とは、前述のAである。目の前にある書物（モノ）の、目で確認できる情報、である。刊写の別、書型、現存の巻冊、装訂、書名・著者編者・序跋、書写情報（奥書など）、出版情報（奥付・見返しなど）、識語、蔵書印などなど。

当文庫のモノとしての『指月夜話』に、著者を知る明確な手掛かりはない。だから、潮音道海の名は事典的情報扱いにしたのである。「全七冊」というのも事典的情報だが、叙述の都合上、第一段落で言う必要があった。だから、ここでは「だったと思われるが」と断定を避けた。ほかの伝本に就けば序跋の有無が確認されるであろうが、確認されたとしても、それは本解題集では事典的情報になる。

その事典的情報（B）は控えめにすることを申し合わせた。内容的評価や研究史を詳しく語らない、と。極端な例でいえば、源氏物語や古今集のような書目に、その内容解説や評価や成立論や文学史上の位置付けや、といったことに筆を割く、そういう場所ではない、ということである。だが、これもひよっとしたらわたしの独善的な基準、ちゃんと伝わったかどうか、いささか心もとないところではあるが。